Interview

チェチーリア・バルトリ 新たなプロジェクトを語る

我々日本人にとっては終戦記念日として心に刻まれた8月15日は、チェチーリア・バルトリにとっては成功の扉が開かれた日であった。「駆け出し」の彼女が大手レコード会社のデッカと専属契約を結んだその日からちょうど30年目の同日、本誌9年ぶりのインタヴューが実現。ザルツブルク音楽祭で出演するオペラ公演の合間を縫って、お話をうかがった（8月15日・ザルツブルク）。

取材・文＝中東生
Text by Shinobu Naka

ザルツブルク音楽祭2018でロッシーニ《アルジェのイタリア女》に出演した現代最高のソプラノの一人、チェチーリア・バルトリ
©Salzburger Festspiele / Monika Rittershaus

自身の監修レーベルを設立 気鋭の若手歌手にチャンスを！

――レコード会社の移籍問題が珍しくない昨今、長期にわたって良い関係を築く秘訣は何ですか。

バルトリ（以下B） 20歳そこそこで専属契約を貰えた幸運に感謝して、常に斬新さを追求していくことでしょうか。時代も良かったのだと思います。当時のレコード会社には時間もあって、私のような若い歌手を発掘して育てていく土壌がありました。プロデューサーがレパートリーも慎重に導いてくれました。今はそうではなくなって、才能のある若い歌手がレコード会社と契約を結ぶまでにとても時間がかかります。例えばヨナス・カウフマンも、チューリヒ歌劇場のパイジェッロ《ニーナ（恋に狂いし）ニーナ》で共演した時、既に世界中の歌劇場から引っ張りだこだったにもかかわらず録音を出せていない状況で、レコード会社と契約したのは、随分後になってからでした。

そんな現在の状況を打開するために、デッカから「バルトリ監修レーベル」を作ってもらって、自分が得られた幸運を今度は若手に与える側になろうと思い立ったのです。その第1弾として、何年も前から共演して、彼の宝物のような声を私が熟知しているハビエル・カマレーナのデビューアルバムが10月に出ます。

――今のクラシック音楽界を嘆く声が、貴女の同世代以上の音楽家から多く聞かれますが、その流れに一石を投じるのは貴女しかできないでしょう。どこからそのエネルギーが来るのですか。

B　情熱でしょうか……。音楽に限らず、何をやる時でも情熱を傾ける……。

――それでも、エネルギーのない時は情熱も傾けられないですよね……。

B　そうですねえ……秘訣はユーモアでしょうか（笑）。

今回デッカのバルトリ監修レーベルからCDがリリースされるハビエル・カマレーナと

祖国イタリアを中心に新たなプロジェクトが続々

――モナコ大公音楽隊も驚きのアイディアでした。いつ頃からの企画ですか。

B　アルバム『サンクトペテルブルク～女帝へ捧げられたアリア』のためのリサーチでロシアに通い始めた頃ですから、2011年くらいだったと思います。昔の君主は皆オーケストラを持っていて、そのためにイタリアからも有能な音楽家がロシアに招かれていた歴史を読みほどくうち、「現在の王室も、当時の楽器を弾きこなせる専属のオーケストラを持っていたら、当時の音楽を当時のような趣旨で再現できるのに」と思い立ちました。「英国王室はもうオーケストラを持っているから……」と探しているうち、モナコ公国が最適だと気付いたのです。モナコのオペラハウスはパリのオペラ座と同じくシャルル・ガルニエの建築で、バロックに最適な劇場なので、当時の人気歌手は皆ここで歌っています。公室は代々芸術にご理解があり、バレエも発展し、モンテカルロ交響楽団もありますが、古楽器のスペシャリストではない。そこで大公と公妃に面会を願い、お話ししたらすぐにご賛同くださったのです。

――まるで神からの啓示みたい。祝福された人生を送っていらっしゃいますね。

B　でも、実現までは大変だったのですよ（笑）。お陰で、来年は彼らとザルツブルク音楽祭精霊降臨祭でヘンデル《アルチーナ》と、当時ヘンデルのライヴァルだったポルポラの《ポリフェモ》を上演して、現代のカストラートたちを結集させます。

――イタリアでもバロック・オペラ・フェスティヴァルをなさるのですよね。

B　ええ、アレキサンダー・ペレイラ総裁がスカラ座に誘ってくれるので、それならばイタリアに浸透しているとは言えないバロック・オペラを、単発ではなくシリーズで上演して、バロック旋風を起こそうと3年連続で計画しました。それをカストラート隆盛の中心地だったナポリに持っていくのが夢なので、現在交渉中です。それから第二次世界大戦の爆撃によって長い間閉鎖されていたリミニの歌劇場の柿落としでも歌います。父がリミニ出身なので、私にとっては特別な想いがあります。

この3つのプロジェクトが来年のイタリアでのニュースです。私にとっては、やはり祖国なのです。

バルトリ in ルツェルン音楽祭 魅惑の《チェネレントラ》

今年のルツェルン音楽祭は、休憩時に皆に供されたシャンパンのように皆を幸せにするロッシーニ《チェネレントラ》でクライマックスに達した。セミ・ステージ上演だが、チューリヒ歌劇場公演時の衣裳と照明効果で不足を感じさせなかった。

バルトリが集めた古楽器の音楽家集団であるモナコ大公音楽隊は、最初特に管楽器が耳に馴染むまで違和感を覚えたが、弦楽器はコンパクトで美しい。普通では考えられないほどの弱音からの盛り上げ、歌のタイミングに密着して動ける自由さ等、その利点が生かされ、バルトリが推す指揮者ジャンルカ・カプアーノの手腕を披露した。

いつもセンスの良い笑いを生むカルロス・ショーソンのドン・マニフィコ、王子らしい気品も備えたエドガルド・ロチャのドン・ラミロ、古き良き時代を思わせるダンディーニ役のアレッサンドロ・コルベッリの歌唱、意地悪い姉のマルティナ・ヤンコヴァとローザ・ポーヴェに囲まれて輝き続けるバルトリは永遠のお姫様だった（9月16日）。

ロッシーニ《チェネレントラ》でタイトルロールをつとめたバルトリ ©Peter Fischli / LUCERNE FESTIVAL